

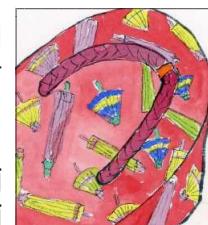
# 新婦人しんぶん

新日本婦人の会目的  
 ☆核戦争の危険から女性と子どもの命をまもります。  
 ☆憲法改悪に反対、軍国主義復活を阻止します。  
 ☆生活の向上、女性の権利、子どものしあわせのために力をあわせます。  
 ☆日本の独立と民主主義、女性の解放をかちとります。  
 ☆世界の女性と手をつなぎ、永遠の平和をうちたてます。

## 今週の紙面

◆1月の発行は、1日号、17日号、24日号です。

2・3面 対談／声明  
 4・5面 新婦人活動／読者の作品  
 6面 NY現地レポート／母の歴史  
 7面 性搾取のない社会を  
 8面 気候危機／まんが  
 9面 インタビュー／文化  
 10面 パズル／工作  
 11面 映画



札幌市 田村信子  
 生きたいね

新日本婦人の会は国連に認証されたNGOです。あなたも一緒に

2026年新春 能登半島地震から2年

# ここで生き続ける

石川・珠洲市 野萱草班

生糸の珠洲生まれの井上さん



SNSで入会した椿原さん

原発反対の運動の中心にいた塚本さん



珠洲に群生する野萱草。黄色い花を咲かせる



班名の名付け親の角口さん

2024年1月1日の能登半島地震との月の豪雨災害で大きな被害を受けた石川・珠洲市。「この地に根を張り、生きていこう」と珠洲で初めて結成された、新婦人の班「野萱草（のかんぞう）班」の班会を訪ねました。



「地震のときは、ここにみんなのおせちを持ち寄って避難した」



故郷に新婦人を  
 地震直後から支援に奔走してきた石川県本部。新婦人の支部がある隣の輪島市からは具体的な要求が届く一方で、珠洲の状況はなかなかつかめませんでした。高屋町出身で石川県本部副会長の近松美喜子さんは、珠洲に足しげく通いながら、「故郷に新婦人の班があつたら、もっと迅速に支援の手が届いたのでは」と思いを募らせてきました。

4面へ

地震で建物の下敷きになり、歩くのに2本の杖が欠かせません。北海道から移住してきて「50年も住んで、こんなことが起こるなんて思わなかつた」と言いながら、「夜は窓から見える月や星がきれい」と、風土とともに暮らす豊かさ、土地への思いにあふれています。

訪問したのは2回目の班会。会場は、高屋漁港がすぐ目の前の集会所です。「店の入り口に『しばらくお待ちください』って札かけて来たんや。行列ができるかもれん」と笑う井上明美さんは、能登半島で「最北端」の個人商店を営んでいます。生糸の珠洲生まれで、植物が大好き。「能登の山を歩くんよ。この辺は春になるとシャクの花でいっぱいになります」と山菜や花の話で盛り上がります。

5人の班員のうち3人は、今も高屋町と大谷町の仮設住宅暮らし。車のある人が会員宅を巡って乗り合わせてきました。「仮設は8畳くらいの広さ。夫と2人だから狭くて、造りも悪くてね。でもそれしかないのね」と話すのは班長の塚本詠子さん。地震で建物の下敷きになり、歩くのに2本の杖が欠かせません。北海道から移住してきて「50年も住んで、こんなことが起こるなんて思わなかつた」と言いながら、「夜は窓から見える月や星がきれい」と、風土とともに暮らす豊かさ、土地への思いにあふれています。

## 珠洲市街地をさらに北へ

能登半島の先端、珠洲市は金沢市から車で約3時間。珠洲市街地から復旧作業がいまなお続く大谷峰を越え、曲がりくねつた道を海岸線に沿つて北上すると、水平線まで見渡せる高屋町の海が見えます。

入会はこちら

